Genreの詩的機能及び意味について

岡本克人

Dictionnaire de linguistique (Larousse 1973)によればGenreは次のように定義されている。

> Le *genre* est une catégorie grammaticale reposant sur la répartition des noms dans des classes nominales, en fonction d'un certain nombre de propriétés formelles qui se manifestent par la référence pronominale, par l'accord de l'adjectif (ou du verbe) et par des affixes nominaux (préfixes, suffixes ou désinences casuelles), un seul de ces critères étant suffisant. Ainsi, d'après ces trois critères, on définit en français deux classes, les masculins et les féminins.

Genreは文法範疇の一であって，フランス語は，これを所有している。フランス語における genre の起源は，周知のごとく，ラテン語のうちに，これを求めることが出来るわけであるが，我々は，さらにさかのぼって，インド＝ヨーロッパ祖語の文法構造中にこれを認める。したがって，恐らくは，このインド＝ヨーロッパ祖語における genre の存在理由の解明が現代の諸言語が genre をなぜ有するか，という疑問に大きな光を投げかけてくれるであろうが，未だ満足すべき解答は得られていない。しかし，一般的には，インド＝ヨーロッパ祖語において，名詞がその意味に従い，有生物と無生物に，さらに有生物は，男性と女性とに分けられていたと推定されている。インド＝ヨーロッパ祖語の子孫であるギリシャ語について，あるギリシャ史家は次のように語っている。

「従って，ギリシア語で話すということは，あたかも画家が男女の性を描き分けるように，言語で事物の性を造形してゆくことになる。もちろんギリシア語以外にも，文法上の性の区別を有する言語は多いけれども，多くの場合，単なる形式に堕していたのに対して，ギリシア人は一種の原始的な心性を保持し続けて，文法上の性別のとおりに，そのまま実際の性別を念頭に置いていたのである。万物の中に生命を感じとる敏感さと，文法上の規則とが結びついていたのである。

かくてギリシア神語において活躍する神々は，怪物や天地山川の神々に到るまで，すべて明確に男性または女性として顕現し，その性別どおりに行動する。大地（ガイア）は女性であって，男性である天（ウラノス）と交わって，多くの神々を生ん

だ。」

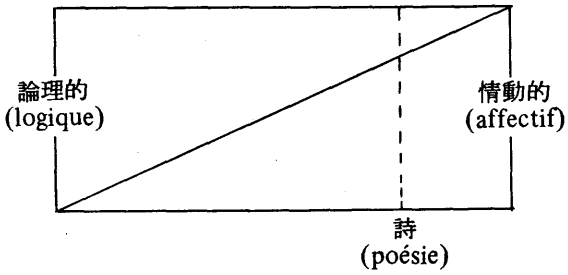
このような解釈は，確かに我々を魅惑するし，又，実際，言語学者，神話学者，人類学者等が今後も断念することなく探究すべき問題とかかわっているように思われる。しかしながら， Jacobsonの言うように，「一連の文法的概念から文化についての推論を引き出そうとしがちな人は，ただちにBoasから警告を受ける。p.175」[(1)]のである。我々は，文法ということを学校文法のレベルでとらえるならば，たちまち認識をあやまり，かなり大まかな結論を下すことになろう。それは次のことばによっても明らかである。

「Whorf の鋭い研究は，文法的概念の一式と習慣的な意識下の神話的・詩的心象とのあいだの錯綜した創造的相互作用を示唆するが，しかしこのことばのパターンと純粋に観念的な操作とのあいだの強制的関係をなんら内含するものでもなく，またわれわれの文法範疇を祖先の世界観から導き出すことを容認するものでもない。Jacobson p.236–7」

そこで，この言明に従い， genreの起源論についての断言はひとまず置くと，浮かびあがってくるのは， genreの存在についての純粋に共時論的記述であって，ここからは，一定のかなり明確な諸現象が観察されるように思われる。小論においては，そのうち特にgenreの詩的機能（と一応，呼んでおきたい）について述べようというわけであるが，まず，それが何を意味しているのか明らかにしなければならない。

言語の本質（言いかえれば存在価値）はA. Martinetも言うように，どこまでもcommunicationにあるはずであるがこの communicationの理論の内にあって，フランス語における文法範疇の一， genreは一体，何を伝達する fonctionを帯びているのであろうか。

P. Guiraudは「あらゆる語(discours)は異なる割合で二つのメッセージを組み合わせている」と，述べ，次のようなシェマを示す。[(2)]



この簡潔で，しかも適切なシェマによって我々はあらゆる話(わ)(discours)の機能について明確な概念を得られる。彼の説明によれば，

「究極においては，一方の極に情動的表現性皆無，またはそれがゼロに近づく高度に客観的・論理的な文体（「三角形の内角の和は２直角である」というような）があるとともに，他方の極には客観的な指示性皆無，またはそれがゼロに近い純主観的・情動的文体（ああ！，おお！，痛い！）とがある。」

我々は，ここで特に genre に焦点をしぼり，このシェマを具体的な例でもって確認してみよう。

(1) 特 許 文

L'invention a principalement pour objets:

I – Un procédé de revêtement d'un support, ledit procédé étant remarquable, notamment, par les caractéristiques suivantes considérées séparément ou en combinaisons:

1^0 – on applique sur ledit support une pellicule de liant pour peinture comprenant une solution filmogène d'une résine organique modifiée par un uréthane, dans des monomères vinyliques copolymérisables avec ladite résine par l'action d'un rayonnement ionisant, ladite résine ayant un poids moléculaire supérieur à 1000 environ, contenant environ 0,5 à 3 unités d'insaturation alpha-bêta oléfinique pour 1000 unités de poids moléculaire et au moins 2 groupes uréthane pour chacune desdites unités d'insaturation oléfinique, et on copolymérise ladite résine et lesdits monomères vinyliques sur ledit support à l'aide d'un rayonnement ionisant. [ベルギー特許 693, 267]

この長い一文には，伝達されるべき厳密な科学的情報と，この特許が要求する正確な領土が示されている。このように長い文が構成されるわけは，法律文でもそうであるが，色々な「解釈の余地」を極力避けるためで，その意味でも上記シェマの左端に位置づけられるものである。ここにおいて genre は専ら統辞的な価値のみを有している。

(2) 小　説

Elle apportait de temps en temps quelque pitance au misérable pénitent, regardait par le trou s'il vivait encore, ignorait son nom, savait à peine depuis combien d'années il avait commencé à mourir,

et à l'étranger qui les questionnait sur le squelette vivant qui pourrissait dans cette cave, les voisins répondaient simplement, *si c'était un homme: — "C'est le reclus"; si c'était une femme: — "C'est la recluse".* (Notre-Dame de Paris)

この例において読者は全く上記(1)と同じ genreの機能を認めはしないであろう。いささかニュアンスのこもった感じを我々は受けるのであり，したがって明らかに，この文においては，genreは単なる文構成の役割，論理的情報の伝達のみでなく，詩的な喚情の機能もあわせもち，したがって我々はこれをシェマにおいては中間のどこかに位置づけることが出来るのである。念のため，次の文を参照されたい。

1) La méthode audio-visuelle Linguaphone a été conçue pour que tout soit facile: il suffit d'écouter des disques, enregistrés par des *professeurs* qui parlent dans leur propre langue.
2) La méthode audio-visuelle Linguaphone a été conçue pour vous permettre d'apprendre la langue de votre choix, chez vous, dans votre fauteuil et sans aucun effort: il suffit d'écouter les voix enregistrées des *professeurs, hommes et femmes,* qui parlent leur propre langue.

1)，2) ともに，実際の宣伝文よりの引用であるが，この教材が男と女の声によって学習効果をたかめるということを主張している事実からして，2)は1)よりも一層，内容を明瞭にしているのであり，いわばこれは論理的な説明であることが明らかである。本例は決して Notre-Dame de Paris よりの例文のように詩的効果をねらったものではなく，この相違は歴然としている。

(3) 詩

Et je m'en vais
Au vent mauvais
Qui m'emporte
Deçà, delà,
Pareil à la
Feuille morte.

(Chanson d'Automne)

最後に，たとえば上記のような詩でもって，我々はこのシェマを満たすことが出

来る。詩がその形式で伝達しようとするのは科学的，論理的情報ではなく，むしろその反対の極にあるものである。ただ詩にどの程度論理的機能をもたせるかは自由であって，詩の形をとりながら歴史を叙述したり，何か「科学的情報」を予言しようとしたりすることも可能である。しかしいずれにせよ，本質的に詩は感情・心理に関するものでシェマにおいては右端あるいは右方に位置づけられるものである。

以上の検討によりgenreという文法範疇も論理的機能と情動的機能をあわせもち，各話(discours)において，様々な比率でこの二機能を使用することが理解された。

小論においては後者の機能に関し，P. Guiraudの情動的 (affectif) という語に代え，詩的(poétique)という表現を一応取った。というのは，この機能が働く基盤は，常に詩的ともいうべき（たとえそれが詩でなくとも）感情の発露であるからだ。たとえばGuiraud自ら挙げた例である，「ああ！」とか「おお！」というのは，思わず出る叫び声であるが，これは詩とは言えなくともそれと根本においては同類のものである。ただしこのような意で詩的機能というとき，Jacobsonの六つの機能の分類のうちの，［詩的機能］（＝注意の対象であるのがメッセージの構造自体であるとき）とは，一応無関係である。

さて，上記シェマと例文により提示されたgenreの詩的機能の側面につき具体的な考察をこころみよう。

O. JespersenはThe Philosophy of Grammarの中で次のようなジョークを引用している。

> L'INSTITUTEUR: Comment donc? Vous êtes incapable de faire l'analyse grammaticale de cette simple phrase: 'L'alouette chante.' Vous avez écrit dans votre devoir: Alouette, substantif masculin singulier. — L'ELEVE: Sans doute. Et je maintiens énergiquement 'masculin': chez les alouettes, il n'y a que le mâle qui chante.

この子供のnaïfな間違いは，ある意味では大いに正しく，極めて興味深い。(alouetteは，しかしféminin である)。alouetteが'masculin'であるとは，一つの隠喩であり，子供にとっては，alouetteが鳴く(chante)ときは，このalouetteは雄に，つまり彼の判断では'masculin'に，きまっているのである。もしここで動詞が他のものなら，彼も'féminin'と答える可能性が大いにあったはずである。

Jespersenが他所で提示した図式は，genreが何を基礎にしているかを示唆している。

GRAMMAR.		NATURE.	
Gender		Sex	
(syntactic):		(notional):	
(1) masculine	words	(1) male	beings
(2) feminine		(2) female	
(3) neuter		(3) sexless things	

すなわち，文法における genre が最も密接に結びついている概念は，sexe なのである。 genre は日本語において「文法的性」と訳されているが，この呼称はやや不適当であるとしても，上の意味で本質を暗示していると言える。この genre の擬セックス性については， J. Damourette と E. Pichon により次のように明言されている。

「フランス語の実体名詞はことごとく男性か女性である。それは疑うべからざる，疑われることのない事実である。国民的想像力は，名詞的実体を．うちに二つのセックスのうちの一つとの類性を含有しているものとしてしか概念しないまでに及んでいて，その結果，擬セックス性がこれらの実体の全般的な分類様式となるまでに至っている（§302）…… 擬セックス性は，フランス人各自の話し方において，したがって思考において，不断の役割を担っている。（§306）……この分配はもちろん純粋に知性的な性格をもつものではない。多少の情意的なものをもっている……擬セックス性は明瞭にセックスとの比較であって，フランス語の単語の女性のものは比喩に用いられる場合に女性にしか比せられ得ないまでになっている（§307）……擬セックス性の分配法は，物の人格化の表現様式である。（§309）（川本茂雄訳）」（語から思考へ ── フランス語文法試案(Paris 1911–1927)）この言明は擬セックス性をあまりに強調しすぎるがゆえ，科学的正当さを欠くが，その主張の中に真実はある程度認められる。[(3)]

同様の発言が C. Bally によってもなされている。「バラはその性を変えてもバラであろうか？」（一般言語学とフランス言語学）

ちょうど子供にとって鳴く alouette は， masculin であったと同じように，フランス人にとってバラは la rose であり， le rose ではないのである。フランス人の海は， la mer でも，イタリア人にとっては，海はどうしても il mare(*m.*)なのである。しかし，それでは英語の sea はどうなのか。シェークスピアに次のような二文がある。

1) If the wind rage, doth not the *sea* wax mad, Threatening the welkin with *his* big-swoln face? Tit. A. III. i. 223–24

（風が吹き荒れりゃ，海が暴れ出してふくれあがって，大空をおびやかす）

［五島］

2) the *sea* being smooth, How many shallow bauble boats dare sail Upon *her* patient breast, making their way With those of nobler bulk! Tr. et Cr. I. iii. 34–37

（海がおだやかに和いでいるときには，底の浅い玩具のような小艇でも，堂々たる大艦と相ならんで，敢えてその胸の上を帆走ります）［五島］

両者とも人格化されているが，1) は男性に 2) は女性になっている。(4)

このような genre とsexe間の結びつきは明らかに存在し，いわば文法の許すかぎり詩的表現では意識され，駆使されるのであろう。もっと正確に言うと，「特に詩において文法範疇は高度な意味論的重要性を帯びる」のである。(Jacobson p.69)

同じ，無性物を示す名詞の genre による誘導でも，英語のようにほとんど消滅し，拘束性のない gender と，仏語の genre では，おのずと違ったものになる。仏語で la mer と書くと，Elle でしか，うけられまい。しかし，この強い拘束性は逆に，他所で強力に詩的意味を発揮するのである。たとえば，次のごとくである。

Oh! regardez; comme *la lune* a l'air étrange ce soir. On dirait *une morte* qui sort d'un tombeau ..... On dirait qu'elle cherche des mortes ..... /

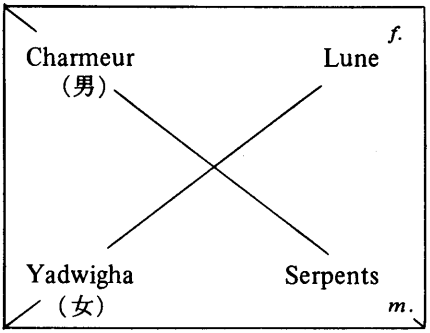
Elle a l'air très étrange ..... A travers les nuages de mousseline, elle sourit, comme *une petite princesse.* (Salomé)

この例においては，la lune は une morte と une petite princesse にたとえられている。この métaphore に関し，注目すべきは，両者が genre (féminin) によって拘束されていることであり，これは先の Damourette と Pichon の言葉を裏付ける。この拘束こそは，意味の強化，sexeを一層換起し明確なイメージとなすことに役立っているのである。すなわち無生物である月はsexeを欠いているが，métaphore（及び代名詞 elle の使用）により，sexeの概念を付与され，女性となるのである。

	GENRE	SEXE
lune	+ (f.)	(F.)o
morte	+ (f.)	+ (F.)
petite princesse	+ (f.)	+ (F.)

(F. は女性)

この genre とsexe間の結合を一層，確かなかたちで証拠だてているのは，Jacobson による克明な研究 —— On the Verbal Art of William Blake and Other Poet-Painters の「Henri Rousseau の最後の画業に附記された詩作」の分析である。(5) Rousseau の絵「夢」において，右上方の白く丸い月は，左端に横たわる裸のポーランド女性 Yadwigha と同種であり，右下方の黒い蛇(pl.) はその対角線上にいる蛇使いと同種である。



Yadwigha dans un beau rêve
f.
S'étant endormie doucement

Entendait les sons d'une musette

Dont jouait un *charmeur* bien pensant
m.
Pendant que la *lune* reflète
f.
Sur les fleuves, les arbres verdoyants,

Les fauves *serpents* prêtent l'oreille,
m.
Aux airs gais de l'instrument.

この絵と詩においてgenreは擬セックス性を示し，両者に見事な整合が見られる。

さらに次のような例は，genreの詩的機能の別種の（すなわち，原理的には同一の），駆使であろう。子供というものには，普通sexeの観念が付与されにくいものである。で，仏語におけるenfantという語は通性であるが，これは少年を指しているか少女を指しているか（幸い）分らない。

すなわちAlain Robbe-Grilletの短篇La PlageはTrois enfants marchent... という文章に始まるが，読者は三人の子供が男なのか女なのか，あるいはその組み合わせであるのか，一向に分らない。作者は海岸を歩く三人の子供について述べながら，その性はどこまでも明らかにしないことによって，まるで映画によくある，海岸風景の遠距離描写の効果を与える。：—

TROIS enfants marchent le long d'une grève. Ils s'avancent, côte à côte, se tenant par la main. Ils ont sensiblement la même taille, et sans doute aussi le même âge; une douzaine d'années. Celui du milieu, cependant, est un peu plus petit que les deux autres.

Hormis ces trois enfants, toute la longue plage est déserte. C'est une bande de sable assez large, uniforme, dépourvue de roches ....

Et tout reste de nouveau immobile, la mer, plate et bleue, exactement arrêtée à la même hauteur sur le sable jaune de la plage ..... Ils sont blonds, presque de la même couleur que le sable: la peau un peu plus foncée, les cheveux un peu plus clairs. Ils sont habillés tous les trois de la même façon, ...

Les enfants regardent droit devant eux. Ils n'ont pas un coup d'œil vers la haute falaise, sur leur gauche, ni vers la mer dont les petites vagues .....

*

Devant eux, une troupe d'oiseaux de mer arpente le rivage, juste à la limite des vagues. ....

*

Leurs trois visages hâlés, plus foncés que les cheveux, se ressemblent. L'expression en est la même: sérieuse, réfléchie, préoccupée peut-être. Leur traits aussi sont identiques, bien que, visiblement, *deux de ces enfants sont des garçons et le troisième une fille.*

子供の性が明らかにされるのは作品が⅔も進行してからである。この後はgarçon, filleという言葉も用いられる。 Close upされた子供達は，はっきりと写し出されるわけである。彼らの言葉も聞くことが出来る。

Les cheveux de la fille sont seulement un peu plus longs, un peu plus bouclés, et ses membres à peine un peu plus graciles. Mais le costume est tout à fait le même: culotte courte et ....

*

....

"Voilà la cloche", dit le plus petit des garçons, celui qui marche au milieu.

Mais le bruit des graviers que la mer aspire couvre ....

Ils décrivent la même courbe au-dessus de l'eau, pour venir .....

*

....

"Tout à l'heure, on n'était pas si près", dit la fille.

Au bout d'un moment, le plus grand des garçons, celui qui ....

Puit toute la troupe est de nouveau posée sur le sable, progressant le long du rivage à cent mètres environ devant les enfants.

La mer efface à mesure les traces étoilées de leurs pattes. Les enfants, au contraire, qui marchent plus près de la falaise, côte à côte, se tenant par la main, laissent derrière eux de profondes empreintes, dont la triple ..... toujours à la même place, la même petite vague.

最後は，また enfants, leurs 等に変わり，あたかも波が打って返すように冒頭のイメージに戻ってこの作品は終わる。

英語からの例であるが，gender を詩的意図によってわざと逆にしたと解釈されたものがある。(6) 漱石は次のような詩を書いた。

Dawn of Creation

Heaven in her first grief said: "Wilt thou kiss me once more ere we part?"
"Yes dear," replied Earth. "A thousand kisses, if they cure thee of thy grief."
They slept a while, souls united in each other's embrace.

（以下略）

創造の夜明け

天は彼女の最初の悲しみのなかでいった。

「お別れする前にいま一度接吻を」

「ああいとしい者よ」と大地は答えた。
「千の接吻を，それがお前の悲しみを癒すならば」
二人はひとときともに眠った。お互いの抱擁のなかに魂を結びあわせて。
（江藤淳訳）

この詩に対して，江藤淳氏はHeaven in *her* first grief said... と，「天」が女性のイメージとしてとらえられているのは，奇怪であるとし，「およそ「天」が女性で「大地」が男性だというのは，考えられるかぎりでもっとも不可解な詩的倒錯である。」という解釈をほどこした。これに対し，大岡昇平氏は厳密な裏付けをもって一矢むくいた。この詩の解釈は，江藤氏にとって漱石と嫂の登世との恋愛に関する解明の鍵になっており，genderの解釈に大きな比重が置かれたわけだが，確かに，このような誤解が生じるところは，英語のgenderの拘束の弱さによるものである。英語におけるheavenは文法的にはheで受けても，sheで受けてもよいのである。したがって，そこに発信者，受信者ともに，解釈の自由ないしは余地が生じる。

以上の例証と考察からも明確化してくるのは，より根本的な問題への観点，すなわち通時論的な意味でのgenreの起源ではなく，いわば共時論的な起源である。それはまた意味論的なもので人間の精神に根ざすものであろうが本論においてはあたかも逆の順で記述してきた。つまり我々は言語の観察から出発して，結局精神の観察へ達するのであるが，精神の多様かつ広大なことを見きわめると，言語の一事象に何が最も対応しているのか一種の起源を求めねばならない。一般に，意味が先行し，言語がこれを追うと，考えなければ，たとえば冒頭に述べたごとく言語から文化を無理やり割り出してしまうようなことにもなるだろう。言語を使用するのは人間であるが，この人間にはsexeが存在し，その存在理由の大きさからも何らかのかたちで言語のうちに，これを表明せざるを得ないであろう。たとえばフランス語にあっては，sexeがgenreという文法範疇にも姿をあらわしているわけである。したがってたとえばsentinelleという語のgenreがféminineであって，uneやlaという冠詞が付されても何ら不思議ではない。結局こう言うことが出来るかも知れない。すなわち人間の意識の原点が常に人間の内にあって，そこからsexeに動機づけられたgenre分布のパターンは人間以外の動物に，無性物に，抽象的概念に拡散していく。したがって，人間を表わす名詞についてのsexeの意識は，かなり綿密

であるが人間をはなれると薄れていく。この現象の一事例として英語の例を挙げてみよう。英語において，普通childやbabyという語はsexeは無視される。(7)

I felt like *a child* of tender years deprived of *its* Nannie.

（私は乳母をとられた幼な子のような思いをしました）　［羽柴］

しかし，そこにある種の感情移入がなされたときは，he-baby, she-babyという，実用的な（すなわち論理的な）区別とは，違った意味で，itが避けられることがある。

Soon you're going to have a *baby*. Maybe you have *him* already. You're happy and excited, but if you haven't had much experience, you wonder whether you are going to know how to do a good job.

（まもなくあなたには赤ちゃんができる。あるいは，もう赤ちゃんがあるでしょう。あなたはうれしくて興奮している。しかし，もしあまり経験がなければ，はたしてうまく育てる方法がわかるかしらと心配になる）　［羽柴］

A mother worries excessively about germs, or traffic. She tries to ward off these dangers by hovering over the *child*, and this tends to make *him* too dependent.

（母親はばい菌や交通事故について極度に心配する。彼女は子供につきっきりでこういう危険を防ごうとする。こういう状態が子供の依頼心を強くしすぎることになる）　［羽柴］

ここにおいて，itという語が文法的には可能でむしろ望ましくても，Sapir流に言うならば心理的な「葛藤」を起こすので，避けられていることは上記の文を書いたのがBenjamin Spockであることからも，当然考えられよう。もっとも「いつもhim or herというのは気がきかないし，また'her'は母親をさすのに必要であるからだ」という説明を彼自身はしているが，彼が意識しなかったにせよ両方の意味あいがあるはずである。ここでの「葛藤」とは文法レベルの「選択」の前段階の一過程として，babyをすっかり人間扱いにするか，あるいはあまりそういう意識をもたないか（つまりsexeの概念を入れない）の二力の衝突である。この迷いは文法の許容性のゆえ出たわけであるが，しかし，同時に文法は結局，最後は一つの表現を選択することを強制するわけである。

たとえばドイツ語のMädchen（少女）という語が，文法的には中性であるのはドイツ人なら誰でも知っているはずだが，日常会話において，いわばこの正規の文法を逃がれ，Sieと女性扱いされる現象があるのは同様のぎこちなさのゆえにであ

ろう。

この種の葛藤 →選択（決定）の過程は人間の精神というものが文法というごく狭く限定された形式を通じて表出される際，当然あってしかるべきものである。もし文法なるものが精神の微細な動きに合わせ無限に自由な形をとるなら，それは文法ではないし，又そのような文法をもつ言語を想定することすら不可能である。いかなる工夫をこらした人工言語も自然語と同じく常にある種の限界にたちまち達してしまうのは，このためである。

次にフランス語の例をあげてみよう。Flaubertは，G. Sandに手紙を書くたびに次のような表現のいずれをとるべきか迷わねばならなかった。(8)

1) Chère maître, si grand, si fort et si doux.
   Chère bon maître adoré.
2) Mon chère maître.
3) Ma chère maître.

この場合はbabyのときとは違い，発信者は男と女のイメージの間を表現の仕方と共にさまよっているわけである。この種の迷いはフランス語の genre の構造上，人間の sexe にいかに対応するかが場合によっては，かなりむずかしくなり，時々出てくるようである。たとえば職業名であるが，acteurと actriceという分与に関しては別に問題は起こらないであろう。というのは， actriceには女である，という意味が明らかに付与されわざわざ表明されているが，この語の signifié に対して人間が心理的抵抗を示さないからである。ところが avocate などになると，これと同じようにはいかない。朝倉氏の言によると，「doctoresseは docteur にはないやさしい心づかいを想起させる」から日常，普通に用いられるが，だからといって，この語で女医に「先生。」と呼びかけると敬意を欠くことになる。したがって次のように言わねばならない。

Toutes mes félicitations, cher *Docteur.* – scénario: *Cette sacrée gamine,* "France" 6–1953.

（（ナイトクラブのボーイが婚約を発表した女医に）先生，このたびはおめでとうございます。） ［朝倉］

このことは結局，何を意味しているのであろうか。doctoresseがやさしい心づかいを想起させるのは，恐らくは，そういう感情を許す場面においてのみであって，逆にいうと学会とか手術室においては，やはりdoctoresseという語を用いると別の意を含みはしないであろうか。というのは「やさしい心づかい」は女性らしさを必

要とする場合であるが，手術中はdocteur医者であることのみが必要で，わざわざdoctoresseというmarqué（有標）の形が選ばれることはあるまい。すなわち，やはりdoctoresseはactriceと同じく，「女」の意味素が良い意味にとられるときに用いられているのであろう。

一般にやはり男性語は男を，女性語は女を換起しやすいことの証明に，フランス語中にあって豊富な termes d'affection（親愛語）と呼ばれるものについて検討してみよう。まず通常は，男については男性語，女については女性語を用いると考えやすいが，これと同時に genre を逆にする傾向も存在する。たとえば次のごとくである。

1) La plupart des amoureux, lorsqu'ils causent ensemble, ont la manie de mettre au féminin ce qui doit être mis au masculin. Combien de femmes disent: *ma chérie,* à leur amant. Et presque tous les hommes disent: *mon chéri,* à leur maîtresse.—PORTO-RICHE, *Le Marchand d'Estampes,* II, 11.

（大部分の恋人たちは，いっしょに話しているときに，男性に置かれなければならないものを女性に置くという妙な癖があります。どれほど多くの女が意中の男に ma chérieと言っているでしょう。また，ほとんどの男も自分の情婦には mon chéri と言っています。）［朝倉］

2) OLPIDÈS: Elle l'a appelé *sa perruche, sa chatte.*
LE GABIER: Lui *son puma, son jaguar.* Ils intervertissaient les sexes. C'est de la tendresse. C'est bien connu. – GIRAUDOUX, La Guerre de Troie, II, 12, 171.

（エレーヌは彼のことをあたしのおおむ，あたしの雌猫と呼んでいた。── パリスのほうはわたしのピューマ，わたしの豹と言っていた。性を入れかえていたんだ。これが愛情というもんだ。よく知られていることだが。）［朝倉］

上例で 1) はともかく 2) になると動物の種属名 chat（すなわち男女両形があっても種属名としては一方の genre のみ用いられる）が，わざわざ chatteという女性形まで出した上，男を呼ぶのに使われている点，注目に価する。

このような genre の転換の理由は，Dauzat によれば，表現に一層情意的な価値を与えるためであるが，つまりここでは一層，相手の sexe のイメージを強化していることになる。文法範疇の固有の価値から逸脱したような用い方は，先にあげた Jacobson の「詩において文法範疇は高度な意味論的重要性を帯びる」という言葉に再びたち返らせる。すなわち逆に言えば文法範疇の駆使（普通は許容される範囲

内で）によって表現の詩的機能を一般に増大させることが出来るわけである。したがって，ここでの genre の転換は， genre の擬 sexe 性を裏切るのではなく，反対に証拠立てている。軽蔑的意図をもって genre の転換がおこなわれることがあるが，これも同じく底に sexe の意味を含ませてあるはずである。

Sale petite *donneuse*! －SARTRE, Les Jeux sont faits, 19.

（（Pierre がLucien を面罵して）けがらわしい裏切り者の小僧め！） ［朝倉］

語の擬 sexe 性というと，ちょうど精神分析における sexe に関するcomplexe の探索を連想させるが，文学作品（ある個人の一種の告白とも見ることが可能であろう）中に好例を見出す：—

> "Viens ici, *mon chat*", dit mon père.
>
> Il me tendait les deux mains, m'attirait contre lui, contre elle. J'étais à demi agenouillée devant eux, ils me regardaient avec une douce émotion, me caressaient la tête. Quant à moi, je ne cessais de penser que ma vie tournait peut-être en ce moment mais que je n'étais effectivement pour eux qu'*un chat, un petit animal affectueux.*
>
> p.62, BONJOUR TRISTESSE

ここにおいては，一見親愛語は，ただペットとしての猫を主人公に連想させているだけのようで，実は，父に抱かれ，かわいがられるべき性的な存在，女性をほとんど無意識に換起させていることが読者の眼には明らかである。実際この作品全体をつらぬく秘められた感情の基調は，それである。だからこそ，ここで親愛語 chat が通常，猫という種属名すなわち男女の区別の観念の及ばぬレベルに存在することは，主人公の無意識の願望の抑圧に，合理化にみごとに「役立って」いることは興味深い。この場合，父の発する mon chat という呼びかけが，また一種の暗号になっているわけで，無意識的な sexe の意味は， ひそかに伝達されるのである。mon chat という語は「意識」にとって許容限度内にあり，せいぜい本当の猫に比してみたりするにとどまる。しかし底に沈む，しめやかな感情を二人は，（少なくとも主人公は）， 直視してはいない。これが，ここで親愛語 mon chat のもつ意味である。

結論にかえて

Genre の本質についての研究は motivation の点で，なかなか困難であり，また狭い意味での言語学ではとらえがたいように思われる。しかしながら本論でも明らか

にしたように，擬sexe性という一つの事実や，これが言に詩的意味を帯びさせることは認めてよいであろう。意味論の今後の進展を待って初めてgenreの「意味」も正確な位置づけがなされると思われる。拙稿においてはメンタリズム（心理主義）的解釈を一貫して重視したが，これはgenre存在の共時的起源を求めたためである。メンタルな中にもメカニスティックな構造を見ようとするわけであるが，あくまでも試みにすぎず結論は現段階としては，さしひかえたい。

(1) R. Jacobson, Essais de Linguistique Générale 「一般言語学」川本茂雄監修
(2) Le Langage (Encyclopédie de la Pléiade)「言語の本質」〈近代言語学大系－1〉p. 250（島岡茂訳）
(3) V.「言語」（月刊）Vol. 1 №3, p. 64
(4) V.「数と性」（英文法シリーズ）五島忠久 p. 95
(5) V.「言語」Vol. 1 №3, p. 61
(6) 江藤淳，「漱石とその時代（第二部）」p. 277 以下．大岡昇平氏の反論については，V.「展望」（月刊）第198号 p. 110
(7) V.「性・人称・代示表記」（英語の語法）羽柴正市 p. 11以下
(8) 以下，Genreの具体的例と考察は，朝倉季雄，「フランス文法覚え書」にくわしく，著者の解釈は興味深い。しかし，より一層，統一的に見られるレベルが存在すると思われる。

・例文の引用及び訳は［ ］によって示した。